

## あとがき

### 自然的時間、物理的時間、社会的時間

太陽と月の動きに合わせた自然的時間、時計の針で均質に刻まれる物理的時間のほかに、社会的・政治的時間というべきものがあるとすれば、二一世紀は、一九八九年の「ベルリンの壁」の崩壊、冷戦終焉と共に始まっていた。

一九一四年の第一次世界戦争勃発から、一九九一年ソ連崩壊までを、「短い二〇世紀、極端の時代」と早々と総括し、描きだしてみせたのは、ロシア革命の年に生まれた歴史学者エリック・ホブズボームであった。

彼が、三冊の大部の著作（革命の時代、資本の時代、帝国の時代）で描いた「長い一九世紀」と比すると、「短い二〇世紀」は、二次の世界戦争を体験した「破局の時代」と、その後の東西冷戦が経済発展競争となった「黄金の時代」で構成される。しかしやがて「地すべり」がおこり、八九年東欧革命・冷戦終焉、九一年ソ連解体でサイクルを終えた、というのだ（邦訳『二〇世紀の歴史』上下、三省堂、一九九六年）。

その著書の冒頭に掲げられた、アイザーク・バーリン以下二人のヨーロッパ知識人・芸術家の二〇世紀短評は、一九九二年に採られたものではあるが、辛辣かつグルーミーであり、物理的時間における二一世紀初頭の不透明性・不安定性とオーバーラップする。

曰く、二〇世紀は「西欧の歴史におけるもっともおそろしい世紀」「虐殺と戦争の世紀」「人類史上最も暴力的な世紀」だったと。科学技術進歩や女性の歴史的台頭から二一世紀の希望を語るさいにも、二〇世紀は「人類がこれまで抱いた最高の希望を打ち出し、同時に幻想も理想もすべて打ち砕いた」（音楽家ユーディ・メニューヒン）と留保が付された。

たしかに、二つの世界戦争に冷戦を加えた核兵器を含む暴力装置の増殖と人為的行使、生態系を破壊しつつ地球を限りなく一つに近づけた科学技術と経済市場の発展は、同じコインの表裏であった。

ホロコーストとヒロシマ——二〇世紀のなかでドイツと日本の軌跡を特異なものとした二つの「極端な」体験は、それが「正常」の延長上での「極端」であったがゆえに、必ずしも「異常」ないし「非合理」と割り切れないものがある。事実、百年の長さで見ると、「破局の時代」に「異常な病理」を体験した二つの国が、「黄金の時代」の「正常な」経済発展の優等生となった。そこに例外や断絶だけを見るのは無理があるから、一方に「ファシズムの近代化効果」「全体主義」「開発独裁」や「一九四〇年体制」「貫通史」の議論が生まれ、他方で反科学主義、ディープ・エコロジーの思想も生じた。二〇世紀の枠内で対立物と映っていたものが、人類史の尺度で測ると、双生児にも見えてくる。

### 「極端な二〇世紀」における正常と異常

だが、二〇世紀の実相は、まだ総括できるほどには、明確ではないのではないか。二一世紀に入って、むしろようやく冷静に振り返ることが可能な、とば口についたばかりではなかろうか？

ホロコーストが非道な国家犯罪と認められたのは比較的早かったが、その全体像が明らかになったのは、実はその記憶が風化した「ベルリンの壁」の崩壊後、旧東独史料の収集・公開によってであった。

ヒロシマ体験に発した日本の平和運動が、「加害者責任」をも併せもつ視点を常識とするには、戦後生まれ世代が過半を占めるまでの歳月を要した。

ホロコーストと併行したスターリン粛清にいたっては、「短い二〇世紀」が終わって、ようやく史資料が現れてきた。

おまけに二〇世紀には、その「極端さ」ゆえに、様々な神話や伝説がつきまとってきた。神話や伝説の影に隠されていた史実を再現するのは、そう容易なことではない。

この間モスクワやベルリンで、ワシントンやニューデリーで、一九二〇- 四〇年代の記録を収集してきた。主として日本人の在外ネットワークに係る外国語資料だが、多くの日本語資料も、世界の公文書館で閲覧できる。そこでは正常と異常が併存し、合理主義の極に非合理があったように、民衆の日常生活のなかに人種差別があり、戦争願望があり、指導者崇拜がビルトインされていた。

ホロコーストの端緒は、ベルリンでは、一九三三年一月ヒトラー政権直後に、はじめは「正常な」日常性のなかで始まった。現地のシナゴグ（ユダヤ教寺院）で手に入れたユダヤ教弾圧史の研究は、それを淡々と日誌にする。三三年二月一七日、ナチ突撃隊の一団がたまたま試験中の国立美術学校に乱入し、何人かのユダヤ人教授を追いだし、教授を守ろうとした学生たちを殴打した。その「突発的」出来事が、四月一三日にはベルリン大学に及び、ドイツ学生団が大学からの「非ドイツ的精神」追放を決議し、ユダヤ人教授の講義ボイコットに入る

(W. Gruner, *Judenverfolgung in Berlin 1933-45*, Edition Hentrich, 1996)。

コブレンツ連邦文書館所蔵の独日協会関係資料では、当時の親日派にはユダヤ人科学者や実業家が多かったのに、まずはドイツ側の役員からユダヤ人がはずされ、やがて協会事務文書の末尾に「ハイル・ヒトラー」と書かれるようになる。それは「敬具」にあたる当時のナチスの定型コミュニケーション様式で、「非アーリア名誉白人」扱いの在独日本人も、そうした雰囲気次第になじんでゆく。

## 二〇世紀の脱神話化のために鳥の眼と虫の眼と人間の尊厳と

二〇世紀の日本にも、様々な神話があった。

たとえばモスクワのロシア現代史史料保存研究センター（旧ソ連マルクス・レーニン主義研究所コミンテルン史料館、現ロシア国立社会政治史文書館＝ルガスピ）でみつけた、一通の英文文書。一九二二年九月の日付があり、大きな朱印が押され、荒畑寒村・堺利彦が署名した、日本共産党の創立綱領だった。二〇世紀に信じられていたところでは、この頃モスクワでは、ブハーリンの指示で天皇制廃止をうたった綱領草案がつくられ、創立期日本共産党はそれをめぐって紛糾し、権力に弾圧され、『獄中十八年』の英雄が生まれたはずだった。だがこの創立綱領には、君主制についての記述はなかった。そればかりか、翌二三年以後の日本からの報告書類にも、普通選挙に積極的に加わるべきか否かという議論しかでてこない。日本の共産党が、天皇制をまともにとりあげるのは、どうやら「二七年テーゼ」以降のようである（加藤「一九二二年九月の日本共産党綱領」『大原社会問題研究所雑誌』一九九八年一二月・九九年一月号）。

あるいは、ワシントン郊外の米国国立公文書館（NARA）で見つけた、戦時米国情報機関戦略情報局（OSS、戦後中央情報局CIAの前身）資料中の、「日本計画」と題する三二頁の機密解除文書。一九四二年六月、日本の太平洋戦争開戦半年後のその三頁のダイジェスト版には、「日本の天皇を、慎重に名前を挙げずに、平和のシンボルとして利用すること」と明記してあった。通常、敗戦前年のグルー前駐日大使ら米国国務省知日派に発想の起源を持ち、GHQ占領・日本国憲法制定期の日本側「国体護持」派とマッカーサー司令部主導の憲法第九条「戦争放棄・戦力放棄」とのバスターとして語られてきた「象徴天皇制」は、すでに真珠湾攻撃直後の、米国側の戦勝を見通した戦後日本の変革シナリオの中に書き込まれていた（『東京新聞』二〇〇四年一月七日ほか、加藤「一九四二年六月米国『日本プラン』と象徴天皇制」『世界』二〇〇四年一二月号、加藤『象徴天皇制の起源』平凡社新書、二〇〇六年）。

日本の信州の山奥の旧家の蔵にも、奇妙な中国語文書が残されていた。それは実は、一九四四年- 四五年、中国延安で毛沢東・周恩来の庇護の元にあった野坂参三が、天皇制廃止を前提としない自分の戦後日本構想を述べ、毛沢東からは好意的な、蒋介石からは儀礼的でクールな、返事をもらっていた。戦後「愛される共産党」に連なるその原文が、小さな茶封筒の中に、無造作に眠っていた。一緒に綴りには、GHQが当時の大蔵官僚池田勇人らに調べさせた、英語の皇室財産一覧表も入っていた、どうやら敗戦直後に合法化された日本共産党が、その戦略・戦術策定のために収集した一級資料で、朝鮮戦争時に非合法化されたさいに保管責任が曖昧になり、ある女性資料室員が生命を賭けて守り抜いた最高機密だったようだ（『朝日新聞』二〇〇四年二月一八日ほか、加藤「野坂参三・毛沢東・蒋介石」往復書簡」『文藝春秋』二〇〇四年六月号）。

著者のウェブサイトでは、ナチス台頭期在独日本人の消息や旧ソ連粛清日本人犠牲者の情報を掲げてご遺族を捜す「国際歴史探偵」のボランティア活動を行い、現代史の諸事件についての史資料と情報提供を求める「情報収集センター」を開設してきた。本報告書の多くは、そうした著者自身のインターネットを活用した情報戦の記録であり、成果である。そうした中で、著書の現代史への視角は、内容的にも変化し、深化してきた。

二〇世紀の百年で生まれた歴史のねじれを解きほぐすには、人類史のタイム・スパンでのマクロな構想力と、一つ一つの出来事のマクロな検証の、双方が必要とされる。鳥の眼と虫の眼を併せもち、鳥瞰図と虫瞰図を一緒に作らなければならない。

そして、二〇世紀の脱神話化とは、鳥と虫の間に人間の眼をおき、人間の尊厳と自由・人権の立場から、日常性のなかに併存した正常と異常、合理と非合理の境界線を引き直す作業にほかならない。叙事詩や英雄伝が書かれるのは、その後でも遅くはない。

社会的・政治的時間は、類としての人間が定め、刻みつづけるものであるから。

## 本報告書に納めた諸論文について

本報告書に収めたのは、私の二一世紀に入ってから現実との格闘と、二〇世紀の見直しの記録であり、その原型のほとんどは、インターネット上の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」に入っているものである。すでに私のウェブサイトは、毎月一人、累計百万人近い人々がアクセスする時論とデータベースの巨大サイトになっており、改めて活字にすることに、若干のためらいもあった。

しかし、この十年のインターネット政治学の経験では、書物の読者とウェブサイトの読者＝リピーターとは、ほとんど重ならない。年齢も地域も異なる特徴を持ち、インターネットの読者は相対的に若く、書物がなかなか手に入らない遠方や外国在住の人々を含んでいる。だから出版世界とインターネット世界の架け橋となることをめざして、インターネットから出発し、インターネットを主要な対象のひとつとした本報告書を送り出すことにしよう。

「初出一覧」にあたるものとして、以下に各章の出自を挙げておく。初出時にお世話になった関係者の皆様に、いつものメールに代えて、活字のかたちで御礼を述べておきたい。

**はしがき** には、「インフォアーツのススメ」（『月刊社会教育』第六一二期巻頭言「かがりび」二〇〇六年一〇月）と、「インターネット時代の集権と分権」（『月刊東京』第二一二期巻頭言「東京インプレッション」二〇〇〇年三月一五日）のファイルの一部をミックスし、アレンジして使った。

**第一部 インターネットと情報政治** には、二〇〇一年九月一日の米国同時多発テロ以来、個人ホームページ「ネチズンカレッジ」内に設けた非戦平和情報ポータルサイト「イマジン」の実践をもとに、アメリカのアフガニスタン、イラク侵攻と、それに対抗する世界と日本の情報戦を記録した諸論文を収めた。

「一 情報戦としての現代」は、もともと「グローバリゼーションと情報」というタイトルで、聖学院大学大学院総合研究所グローバリゼーション研究会第一二回研究会で報告した講演のテープ興し記録（聖学院大学総合研究所『聖学院大学総合研究所紀要』第三三号、二〇〇五年）を下敷きにし、つい最近、二〇〇七年一月二七日に一橋大学社会学部・読売新聞立川支局共催公開市民講座「現代という環境」で行った「インターネットー情報という疑似環境」と題する講演のために集めたデータと資料で補い、「です・ます」調を「である」調に直しながら、大幅に加筆・改稿した。

ビギナー向けの講演記録「インターネットー情報という疑似環境」自体は、二月二日付読売新聞多摩版に全頁を使って報道された後、旬報社から近く刊行される渡辺治・渡辺雅男編『「現代」という環境——〇のキーワードから』に収録される予定なので、あわせて参照されたい。

「二 情報戦とインターネット・デモクラシー」の直接の原型は、「九・一一以後の情報戦とインターネット・デモクラシー」と題して、公共哲学ネットワーク編『地球的平和の公共哲学——「反テロ」世界戦争に抗して』（東京大学出版会、二〇〇三年五月）に発表した論文だが、もともとは、小林正弥氏らの第三回公共哲学研究会「地球的平和問題——反『テロ』世界戦争をめぐる」（二〇〇一年一月二八—三〇日、千葉大学）のセッション報告に手を加えたものである。さらに遡れば、二〇〇一年一月に韓国で開かれた日韓平和文化ネットワーク形成シンポジウム基調報告「九・一一以後の世界と草の根民主主義ネットワークーアメリカ、日本、韓国関係の再編」（日本語版は『日韓教育フォーラム』一一号、二〇〇一年一月）、それを『データパル 二〇〇二』（小学館、二〇〇二年二月）のために改訂した「ネットワーク時代に真のデモクラシーは完成するのか」があり、新情報を加えてヴァージョンアップを重ねてきたものである。

「三 現代日本社会における「平和」」は、同題での、歴史学研究会『歴史学研究』第七六九号（二〇〇二年一月）特集『「対テロ戦争」と歴史認識」への寄稿である。

「四 情報戦時代の世界平和運動」は、同題の『世界』二〇〇三年六月緊急増刊「NO WAR! 立ち上がった世界市民の記録」への寄稿と、その続編にあたる「大義の摩滅した戦争、平和の道徳的攻勢——「アブグレイブの拷問」をめぐる情報戦」（『世界』二〇〇四年七月号）をまとめて一本にしたものである。

「五 小泉劇場インターネット版の盛衰」も同じ手法で、「小泉首相のメールマガジン、人気取りに走れば手痛いっぺ返しも」（『週刊エコノミスト』二〇〇一年六月二六日号）、「ウェブ上に集った市民が現実政治を変えている」（『週刊エコノミスト』二〇〇二年七月二日号）に、「護憲・論憲・改憲の幅と収縮可能性」（日本民主法律家協会『法と民主主義』二〇〇六年一月号）を加えてアレンジしたものである。

この系列では、「グローバルな世界と＜私たち＞の従軍」という、青弓社『従軍のポリティクス』（二〇〇四年七月）への寄稿論文もあるが、分量と内容的重複から割愛した。

**第二部 「洋行インテリ」の情報ネットワーク** は、本科学研究費による研究の成果の直接的・中心的成果である。国家と国家、イデオロギーとイデオロギーの情報戦のはざままで翻弄された、戦前社会主義・共産主義運動と在外ネットワークに関わった日本人たちの記録と記憶を接合した諸論文を、編んでみた。

冒頭に、英語論文 Personal Contacts in German—Japanese Cultural Relations during the 1920s and Early 1930s (“Japanese—German Relations, 1895—1945 War, Diplomacy and Public Opinion”, edited by Christian W. Spang, & Rolf-Harald Wippich, Routledge, 2005) を掲げた。ワイマール時代からヒトラー権力掌握期の日

独関係を概観し、ベルリン日本人反帝グループに焦点を当てたもので、「洋行インテリのネットワーク」問題を概観しているからである。

「一 ベルリン反帝グループと『三二年テーゼ』の流入」は、その遠い起源は、「政治と情報—旧ソ連秘密文書の場合」と題して年報『社会と情報』創刊号（一九九六年）に寄稿した小論であるが、本報告書収録にあたって大幅に加筆した。

「二 『伯林週報』『中管時報』発見記—鈴木東民から白井晟一へ」は、二〇世紀メディア研究所の『インテリジェンス』誌創刊号（紀伊国屋書店、二〇〇二年三月）に寄稿した「幻の日本語新聞『ベルリン週報』を求めて—サイバー・メディアによるクラシック・メディア探索記」を、出版物とインターネットの双方に公表し掲載することにより、実際に『伯林週報』現物がみつき、そのことを『インテリジェンス』第二号（二〇〇三年三月）に報告した「幻の日本語新聞『伯林週報』『中管時報』発見記」をもとにしたものである。私がインターネット上で長く進めている「国際歴史探偵」の典型的な成果で、出版物とインターネットの情報戦コラボレーションがスムーズに進んだ事例報告である。

この点では、現在インターネット上で「日独同盟に風穴をあけた日本人<崎村茂樹>探索」を日独連携で進めているので、ぜひ参照し、情報を寄せていただきたい

<http://www.ff.ij4u.or.jp/~katote/sakimurashigeki.html>).

「三 ヒトラー政権樹立を見た日本人—島崎蒔助と竹久夢二の交点」の原型は、加藤哲郎・島崎爽助編『島崎蒔助自伝—父・藤村への抵抗と回帰』（平凡社、二〇〇二年）という、通常文学史のジャンルに属する領域で刊行された書物に寄せた解説文「島崎蒔助とベルリン日本人左翼グループ」である。島崎蒔助とは、作家島崎藤村の末子で父に反抗し左翼運動に走った画家であり、共編者の島崎爽助氏は、その長男でプロダクト・デザイナーである。およそ政治の対極にある文学者・芸術家の方々と、貴重なネットワークを作ることができた。

そのきっかけとなったのは、私のホームページ「ネチズンカレッジ」の「国際歴史探偵」欄をグーグル検索で見つけ、亡父の遺した手記・資料の存在を教えてくれた、島崎爽助氏の一通の電子メールだった。その縁で、同書の刊行と一緒に開催された群馬県桐生市大川美術館の「描かざる幻の画家 島崎蒔助遺作展」の解説のいくつかを、並行して探求していた画家竹久夢二の「洋行」と関わらせて論じる機会を持った。大川美術館の館報『ガス燈』二〇〇二年七月号に寄せた「島崎蒔助のセピア色と『絵日記の伝説』」、『大川美術館・友の会ニュース』二〇〇二年八月号に寄せた「島崎蒔助と竹久夢二—ナチス体験の交錯」、それに『平出修研究』第三二号（二〇〇〇年六月）所収の「ドイツ・スイスでの竹久夢二探訪記」などを下敷きに、一本にした。実はこのネットワークの中心にいたのは演出家・俳優千田是也であったが、その生涯と思想については別書が必要になる。

「四 勝野金政のラーゲリ体験と国崎定洞の粛清スターリン体制告発の先駆者」は、二〇〇一年一月一日に、勝野の母校である早稲田大学小野梓記念講堂で開かれた「勝野金政生誕百年記念シンポジウム」での基調講演「勝野金政にラーゲリ体験をもたらした魅力と権力—旧ソ連における日本人コミュニティ」をもとに、文化人類学者山口昌男氏が「日本のソルジェニツィン」と評し、故石堂清倫氏が「日本のメドベージェフ」と評した、元片山潜私設秘書勝野金政の生涯と思想を、私が長く探求してきた元東大医学部助教授国崎定洞との交点でまとめたものである。その末尾の「現代ロシアの日本人残留遺児」は、『山本正美治安維持法裁判陳述集』（新泉社、二〇〇五年七月刊）に解説として寄せた、「ヴィクトリア手記が教えるもの」がもとになっている。

「五 社会民主党宣言から日本国憲法へ」は、「日本共産党二二年テーゼ、コミンテルン三二年テーゼ、米国OSS四二年テーゼ」という長い副題付きで、社会主義理論学会第一六回研究・討論集会（二〇〇五年四月二九日、東京・全水道会館）で報告したさいのテーゼ興し原稿である。『葦牙』第三一号（二〇〇五年七月）に掲載されたもので、通説とは大きく異なる日本社会主義史についての問題提起論文である。この報告とその後の反響を見ただうえで、岩波講座『「帝国」日本の学知』第四巻『メディアのなかの「帝国」』収録論文が学術的に書かれているので、併せて参照していただきたい。

「六 国家権力と情報戦—『党創立記念日』の神話学」は、もともと一つの論文であった「党創立記念日という神話」（加藤哲郎・伊藤晃・井上學編著『社会運動の昭和史—語られざる深層』白順社、二〇〇六年、所収と「国家権力と情報戦」（『情況』二〇〇六年六月号）を、一本に戻したものである。

**第三部 戦争・占領・革命と情報戦** には、二一世紀に入って私の研究の「本店」になってきた、現代史研究と情報戦研究が交錯する諸論文を収めた。といっても、本格的学術論文の体裁をとったなどは別著に収録することにし、むしろ「情報戦」に引きつけた学会口頭報告や講演記録を、本報告書用にアレンジして編集した。それは、第二次世界大戦の前後における、主としてソ連とコミンテルンでリヒャルト・ゾルゲ、尾崎秀実と野坂参三が関わった世界的規模での諜報活動と、連合軍としてソ連と連携しつつ地下では対抗していた、アメリカ合衆国戦略情報局（OSS、戦CIAの前身）の情報戦に関連する諸論文である。このうち「野坂参三・毛沢東・蒋介石往復書簡」、「天皇を平和のシンボルとして利用する」と明記した一九四二年六月米国戦略情報局（OSS）「日

本計画」の発見については、記者会見も行われ、日本語ばかりでなく英語や中国語の新聞でも大きく報じられた。

「一 戦争と革命――ロシア、中国、ベトナムの革命と日本」は、岩波講座『アジア・太平洋戦争』第八巻『二〇世紀の中のアジア・太平洋戦争』（岩波書店、二〇〇六年）のために書かれたものである。

「二 体制変革と情報戦――社会民主党宣言から象徴天皇制まで」は、前論文と並行して書かれ、岩波講座『「帝国」日本の学知』第四巻『メディアのなかの「帝国」』（岩波書店、二〇〇六年）に寄せたものである。

「三 岡繁樹の一九三六年来日と荒畑寒村の『転向』――ゾルゲ事件の知られざる背景」は、「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の一九三六年来日と偽装転向」と題して早稲田大学山本武利教授の主宰する二〇世紀メディア研究所の雑誌『インテリジェンス』第四号（紀伊国屋書店、二〇〇四年五月）に寄せた報告を、以下のゾルゲ事件関係の論文につながるようにアレンジして収録した。

「四 ゾルゲ事件と米国共産党日本人部――反ファシズム連合国の情報戦」は、もともと「イラク戦争から見たゾルゲ事件」と題して、日露歴史研究センター主催ゾルゲ・尾崎秀実処刑六〇周年記念講演会（二〇〇四年一月）で行った報告で、講演記録集『現代の情報戦とゾルゲ事件』（二〇〇五年四月、日露歴史研究センター）に収録されたものを、改稿したものである。

「五 ノモンハン事件期のゾルゲ＝尾崎グループ」は、「国際情報戦のなかのゾルゲ＝尾崎グループ――リュシコフ亡命、ノモンハン事件、シロトキン証言」と題して、第四回ゾルゲ事件国際シンポジウム「ノモンハン事件とゾルゲ事件」（二〇〇六年五月、ウランバートル）に報告したもので、『労働運動研究』復刊第一四号（二〇〇六年八月）に掲載された。

「六 戦時米国の『天皇を平和の象徴とする』構想と東アジア」は、「二一世紀に日韓現代史を考える若干の問題――一九四二年の米国OSSから二〇〇四年の東アジアOSSへ」と題して、第七回日韓歴史共同研究シンポジウム（二〇〇四年八月）に報告されたものである。シンポジウムの直前までメリーランドの米国国立公文書館でOSS資料と格闘し、「天皇を平和のシンボルとして利用する」と明記した「日本計画」原文発見の興奮さめやらぬ中で、まとめたものであった。本書に収めたのは、『第七回日韓歴史共同研究シンポジウム報告集』（二〇〇五年）に収録された報告である。

この時初めて、韓国と日本の歴史学者たちの前で公表したOSS「日本計画」の発見については、二〇〇四年一月七日の共同通信配信で「天皇を『平和の象徴』に 米国機密文書で判明」と、『東京新聞』『日本経済新聞』ほか多くの新聞で大々的に報じられた。ちょうどメキシコで出席していた国際会議の議場でも英文報道が読み上げられ、同席していた占領史研究の碩学袖井林二郎教授、メキシコ大学院大学の佐野碩研究家田中道子教授らとの酒の肴となった。その新資料の解説が、「新史料発見 一九四二年六月米国『日本プラン』と象徴天皇制」（『世界』二〇〇四年一二月号）を経て、書き下ろしの拙著『象徴天皇制の起源 アメリカの心理戦「日本計画」』（平凡社新書、二〇〇五年）に結実した。「日本計画」自体は、二〇〇七年四―五月に衆議院憲政記念館で開かれた「日本国憲法施行六十周年記念展示」四八点の一つとして日本政府からも公式に重要資料として認められ、マッカーサー草案等と並ぶ英文日本国憲法関係資料として展示された。

「七 戦後天皇制をめぐる野坂参三、毛沢東、蒋介石の交錯」も『野坂参三・毛沢東・蒋介石』往復書簡」と題して『文藝春秋』二〇〇四年六月号に発表したものを、文藝春秋社の了承を得てインターネット版に拡張したデジタル原稿の活字化である。雑誌掲載の主旨である日本語訳往復書簡資料全文発表に加えて、雑誌では短縮せざるをえなかった資料発見の事情や解説上の意味について、やや詳しく展開している。この資料発見も、記者会見で発表され、二〇〇四年二月一二日『東京新聞』などに共同通信から「天皇制早期廃止に消極的 野坂氏に毛主席が書簡」と配信され、二月一八日には『朝日新聞』で「毛沢東の直筆手紙発見 天皇制なくせぬ、野坂参三氏あて」と報道された。それは翻訳され、『ジャパン・タイムズ』や『中文導報』等でも大きく報じられた。中国の中央党史編纂所、台湾の蒋介石伝記編纂室にも届けられ、以来、多くの中国人研究者の来訪を受けることになった。

**第四部 情報戦時代の「帝国」と民衆** には、一方にアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの共著による壮大な理論的問題提起の書『帝国』と、他方に二〇〇一年一月から始まった二一世紀型社会運動である「世界社会フォーラム」を見据えて書いてきた諸論文を集めた。総括的には、「反ダボス会議のグローバリズム」という『週刊エコノミスト』二〇〇三年五月一三日号「学者が斬る」に掲載された短文があるが、ここではやや理論的に論じた諸論文を編んでみた。

「一 マルチチュードは国境を超えるか」は、同題で二〇〇三年四月二六日に現代史研究会で行った報告のテープ興し原稿で、『情況』二〇〇三年六月号特集『「帝国」を読む』に収録されたものに手を入れた。

「二 グローバル情報戦時代の戦争と平和」は、「ネグリ＝ハート『帝国』に裏返しの世界政府を見る」の副題を付して、日本平和学会編『世界政府の展望』（『平和研究』二八号、早稲田大学出版局、二〇〇三年）に寄稿したものである。

「三 グローバリゼーションは福祉国家の終焉か」も、「ネグリ=ハート『帝国』への批判的評注」の副題付きで、『一橋論叢』第一三〇巻四号（二〇〇三年一〇月）に掲載された。

「四 インドで世界社会フォーラムを考える」は、もともと「情報戦時代の「帝国」アメリカ包囲網——インドで「世界社会フォーラム」を考える」として『葦牙』第二九号（二〇〇三年七月）に書いたものをもとにしているが、世界社会フォーラムについては、その後にウィリアム・フィッシャー、トーマス・ポニア編『もうひとつの世界は可能だ——世界社会フォーラムとグローバル化への民衆のオルタナティブ』（日本経済評論社刊、二〇〇三年一二月）を加藤哲郎監修、大屋定晴、山口響、白井聡、木下ちがや監訳で刊行し、ウェブ上では現在も定点観測を続けているので、大幅に改稿・加筆してデータベース的意味を持たせた。

「五 日本の社会主義運動の現在」は、もともと同題で北京大学国際関係学院世界社会主義研究所主催シンポジウム「冷戦後の世界社会主義運動」（二〇〇二年一月、北京泉山荘賓館）に提出され、『葦牙』第二八号（二〇〇二年七月）に報告全文が掲載されたものであるが、本書では、帰国後に『社会体制と法』第三号（二〇〇二年五月）に寄せた参加記「現代世界の社会主義と民主主義——北京大学国際シンポジウムから見えたもの」を組み込んで一本にしたものを収録した。

### 情報収集のための「国際歴史探偵」

二〇〇六年夏のロシア紀行は、元アメリカ西海岸日本人移民労働運動指導者でスターリン粛清の日本人犠牲者「ササキことケンモツ=健物貞一」のロシア残留遺児アラン・ササキさんを、健物家のご遺族と共に訪ねる旅であった。

アランさん一家と会ったニジニ・ノヴゴルドは、ロシア第四の大都市とはいえ、モスクワから鉄道で五時間だった。作家マキシム・ゴーリキーの生まれ故郷で、旧ソ連の一九三二—九〇年は「ゴーリキー市」という名前で、外国人立入禁止の秘密都市だった。またソ連水爆の父だったサファロフ博士が、民主平和活動家に転じて後、モスクワでの活動を禁じられて「島流し」にされていた町である。

ニジニ・ノヴゴルドには、モスクワでは一五年前に引きづり下ろされたレーニン像が健在で、「ソ連」の雰囲気があちこちに残っていた。旅に持っていった二〇〇四年ピューリッツァー賞受賞作アン・アプルボーム『グラグ ソ連集中収容所の歴史』（白水社）には、晩年のゴーリキーがスターリン粛清合理化宣伝隊に動員された記録が出てくる。しかしニジニ・ノヴゴルド時代のゴーリキーは、「どん底」の舞台となったクレムリン=要塞城壁下の貧民街を描いたヒューマンな作家だった。

何よりも、アランさんと健物家ご遺族の再会が感動的だった。日本人の顔をもちながら日本語がわからないアランさんと、ロシア語のわからないご遺族とを、日本から一緒に行ったロシア研究者と現地で日本語を学ぶ若い通訳が、懸命に引き合わせた。健物貞一のもう一人の遺児、アランさんの妹ジェニーが、健物貞一の一九三八年四月に逮捕されて後、すぐに両親と生き別れになり死亡したことが、七〇年近く立って判明した。

健物貞一の妻だった朝鮮人革命家リ・ボヒャさんは、健物貞一の逮捕時、ウクライナの原野に追放され、苦難の人生を送ったことも分かった。

モスクワでは、アランさんと健物家の出会いのきっかけを作った須藤政尾遺児ミハイル・スドーさんと、同じような苦難を味わった山本正美遺児ヴィクトーリア・ヤマモトさんと、健物貞一ご遺族・アラン家の、在露日本人残留遺児三家族の出会いの場もあった（「歴史の荒波を越え、三指導者の遺児ら対面」『朝日新聞』二〇〇六年八月一九日夕刊）。

須藤政尾が処刑されたプトヴォの森を再訪し、すっかり綺麗になった正教会の司教に歓迎された。修道院の図書館で、一九九八年の前回訪問後、須藤政尾以外に八人の日本人がプトヴォで処刑されたいのでその足跡を調べてほしいと、大部のロシア語資料（受刑者リスト）を受けとった。これらの解析が、新たな仕事になる。

ミハイル・スドーさんは、地質学者のかたわら、その後も日本語の勉強と民間の日本語学校を続けていた。ヴィクトーリアさんの二人のお孫さんも、そこで日本語を学んでいた。スドーさんは、ちょうど『子供のための日本語』というロシア語の本を出したばかりで、父の祖国への郷愁は、老いてますます強まっているように見えた。

現地の日本人ジャーナリストとも交流し、新興石油大国ロシアの最新事情も仕入れることもできた。かつての常宿、クレムリン前のインツェリスト・ホテルが解体され、ホテル・モスクワもホテル・ロシアも建て直されていたのが、寂しかった。

### 「情報共同体」から「情報ネットワーク」へ

本報告書は、そんな「国際歴史探偵」の旅を背景にした、二〇世紀の情報戦と在外日本人情報ネットワークの研究結果の報告である。

戦間期「洋行インテリ」の足跡をたどる「国際歴史探偵」の長い旅を総括する過程で見いだしたものは、「ネッ

トワーク」であった。当初、丸山真男が敗戦直後の日本人「インテリ」の特質として特徴づけた「悔恨共同体」との対比で、「情報共同体」と想定してフィールドワークと事例研究を重ねてきたが、「洋行インテリ」のつながりは、「共同体」というより「ネットワーク」と特徴づけた方が適切な、地理的広がりと多様性を持っていたことである。戦間期の「情報共同体」は、戦後「悔恨共同体」へと向かわず、「情報ネットワーク」により結ばれた、今日のグローバル社会を先取りする現代的性格を有していた。

問題のこの側面は、著者を研究代表者として平成19年度から発足する研究チーム、科学研究費基盤研究(B)課題番号19330031「移動と情報ネットワークの政治学—『帝国』と越境するマルチチュード」に引き継がれる。若い研究者たちが、「歴史探偵」の醍醐味を味わってくれば、それ自体が研究ネットワークになる。

「国際歴史探偵」の諸成果は、多くの先学、研究者、心あるジャーナリストの方々の協力で可能になった。より直接には、一方で旧ソ連やアメリカ、日本の国立公文書館、外交史料館などの史資料公開・現地探索と共に、他方での歴史的証言者、そのご遺族、関係者の史資料提供とインタビューによって、はじめて得られたものである。

現在でもベルリンで健在の国崎定洞遺児タツ子さんをはじめとした国崎家の方々、日本人の亡父と引き裂かれてロシアに遺されたミハイル・スドー、アラン・ササキ、ヴィクトーリア・ヤマモトさん御一家、尾崎秀実ゆかりの今井清一教授、故人となった寺島儀蔵、須藤政尾、松田照子、片山潜、勝野金政、根本辰、健物貞一、永浜丸也、照屋忠盛、又吉淳、永井二一、小石濱蔵、安保由五郎、徹武彦、鶴飼宣道、鬼頭銀一、永田美秋、宮城与徳、千田是也、佐野碩、島崎蒔助、村山知義、藤森成吉、井上角太郎、川村金一郎、小栗喬太郎、八木誠三、蜷川虎三、山本勝市、岡田桑三、田中忠雄、ねずまさし、小林陽之助らのご遺族・ご親族の方々に、心から御礼したい。

なによりも、「国際歴史探偵」の前著『国境を越えるユートピア』（平凡社ライブラリー）刊行以後に逝った、喜多村浩、鳥居敏文、山脇道子、山根和子、安達重子、山本菊代、島崎君代、村山亜土、鶴飼勇、金澤幸雄、米原万里、田中真人の皆さんの御霊前に、貴重な証言と資料、助言をいただいたまま、生前に成果のまとめができずにきた、著者の怠慢の許しを乞いたい。

本報告書が、リベラルアーツを身につけたシチズンたちと、インフォアーツを持ったネチズンたちの、対話のきっかけとなることを願っている。